Key Leader's Voice

作家・エッセイスト、元日銀副総裁
藤原 作弥 *Sakuya Fujiwara*

EFO SELECTION

近代日本160年の歩みから未来を展望する

～時代を俯瞰する「知」を養うために～

経済記者から日銀副総裁へ転身、日立総合計画研究所の社長を務めただけでなく、作家・エッセイストとしても活躍してきた藤原作弥氏。自身の原点となった幼い頃の満州での体験や戦後の日本と共に歩んできた経験、そして歴史への造詣を基に、近代日本の社会システムは40年周期で変遷してきたと指摘する。

国際秩序が乱れ混迷の度を深めるグローバル社会の中で、これからの日本社会のグランドデザインはどうあるべきか。自身の体験を織り交ぜながら近代日本160年の歩みを振り返り、次のターニングポイントとなる2025年以降の日本の姿を展望する。

40年周期で近代日本の変遷を見る

嫌いだったはずの経済がおもしろく

――藤原さんは以前から日本の近代社会システムには耐用年数があり、40年の周期で変遷してきたと指摘されています。その着想に至った経緯を教えていただけますか。

日本の社会システムに耐用年数があることをはっきりと意識するようになったのは、バブル景気が始まった頃のことです。敗戦からの復興は当然であるとしても、世界でも突出した成長ぶりを示し、急激な好景気に沸いているのはなぜだろう、という疑問が出発点です。

当時、僕は新聞記者で経済・金融を担当していたのですが、そもそも希望していなかった分野でしたから嫌々ながら取材をしていました。ところが、そのダイナミックな変化を見ているうちに「この変化は何だ？ おもしろい！」と思うようになって経済に関心を持てた。そして、景気の波から社会の周期ということについて考えるようになったんです。

その前段として、そもそもなぜ嫌だった経済記者を辞めずにいたのかというと、記者になって1年目に配属されたのが大蔵省（当時）担当で、大臣であった田中角栄さんの人物に魅せられてしまったからです。彼は尋常高等小学校しか出ていなかったとのことでしたが、とてもユニークな発想ができる人でした。僕が見た限りでは、当時の正則英語なども大卒の官僚たちに負けないぐらいしっかり身につけていましたし、高度な哲学書や経済理論書こそ読まなかったけれど、読まなくても自分の体験の中でそれらの理論をつかんでいるというような、すごい人物でした。

それで大蔵省の記者クラブにとどまり、角栄さんや後任の福田赳夫さんを間近で見てきました。その影響もあって、経済を通して世の中全体を見ることがおもしろくなり、さらに社会人としてさまざまな経験をする中で、日本の近代史に興味を持つようになりました。そうこうしているうちにバブル景気が崩壊したこと

撮影協力　公益財団法人 国際文化会館

All Rights Reserved, Copyright ©2023, Hitachi, Ltd.

で、社会の循環の周期ということについて考え始めたわけです。

社会の周期に関する説でよく知られているのは「コンドラチェフの波」です。ロシアの経済学者ニコライ・コンドラチェフが提唱した学説で、技術革新によって景気が拡大し、やがて縮小するという長期の循環は、約50～60年周期で起きるというものですね。彼の死後、オーストリアの経済学者ヨーゼフ・シュンペーターによってその学説がコンドラチェフの波と名づけられたのでした。

そのように物事を体系的に考えることの重要性を、僕は経済・社会学者の公文俊平さんから教わりました。公文さんの主な研究対象は社会システムで、コンドラチェフの波は日本の社会システムの変化にも当てはまると説いていました。

ただ僕自身は、自分の体験に照らして考えると、60年とは少し周期が異なるのではないかと感じていました。特に日本の場合、西洋の歴史スケールを当てはめて考えられるのは明治以降であり、近代国家としての日本の歩みについては日本独自の考え方が必要なのではないか、と。

歴史の意外性と周期性

――周期というものさしで物事を見ると、社会や歴史を俯瞰できますね。

一定の長さで区切ることが議論のすべてではありませんが、物事を体系的に考えるときの、一つの手がかりになります。

政治システムでは、アメリカの政治学者ジョージ・モデルスキーが、世界の覇権国家は100年周期で交代していくという、覇権サイクルの長波理論を提唱しました。15世紀末から現在までの間に五つのサイクルがあり、ポルトガル→オランダ→イギリス第一期→イギリス第二期→アメリカと、それぞれが覇権国家として国際秩序の形成を主導してきたという説です。覇権国家が交代するきっかけはコンペティターとの争いで、例えば、ポルトガルに対抗していたのはスペインですが、次の覇権国家はオランダ、そのオランダにはフランスが対抗していたけれど、次の覇権国家はイギリスだったというふうに、次の覇権国家はそのコンペティターではないという法則性があります。

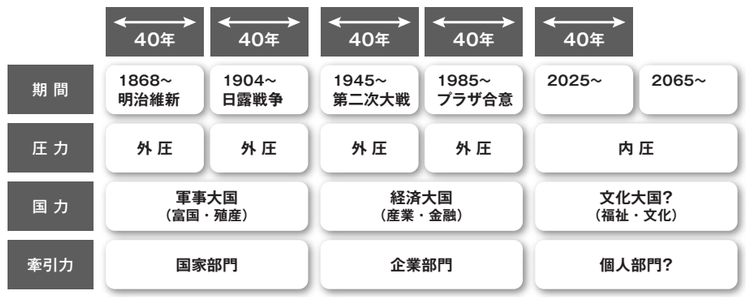
そうした歴史の意外な展開を実感させられたのが、アメリカ特派員時代に目の当たりにした第一次ニクソンショックです。当時、アメリカはソ連と東西冷戦状態にあり、中国とも対立していましたが、ソ連には構わず1972年にニクソンが北京を訪問して米中関係を和解へと転換させました。まさに当時の流行語「アッと驚く為五郎」です（笑）。

それで、なるほど歴史に法則性を見いだすのはおもしろい、じゃあ日本の歴史はどうだろう、と考えてみたのです。

――40年周期について、具体的に教えていただけますか。

僕が考える法則性は、近代日本の社会システムは、およそ40年ごとに耐用年数が切れて次のシステムに移行する、というものです。第一のサイクルは1868年の明治維新から、第二は1904年の日露戦争から第二次世界大戦の敗戦まで、第三は敗戦の1945年から、第四が1985年のプラザ合意からの40年です。第一と第二のサイクルでは欧米列強に「追いつけ追い越せ」をスローガンに軍事大国をめざしました。しかし、それが敗戦で失敗に終わり、第三と第四のサイクルでは戦後復興、高度経済成長の波に乗って経済大国をめざしました。しかしバブル経済崩壊という失敗があり、今日に至ります。近代日本は、「軍事の戦争」と「経済の戦争」を転換点に、社会システムをつくり変えてきたのです。この法則で考えると、次のターニングポイントは2025年前後になります。

この40年周期説については細部までロジカルに詰めているわけではないため、これまでも正面から取り上げて話したことはありません。ただ、かつて半藤一利さんや司馬遼太郎さんにお話しした際に、「おもしろい」と関心を持っていただけました。歴史に造詣の深い方々と意見が一致したという点では勇気づけられ、少し自信が持てました。



日本の耐用年数（40年周期）

歴史評価のあるべき姿を教えてくれた祖父

祖父が見た戊辰戦争

――では40年周期説を下敷きに近代史を振り返ってみたいと思います。日本の近代は明治維新によって始まりますが、藤原さんのお祖父様はその前段階である戊辰戦争に関する記録を遺されたそうですね。

はい。戊辰戦争について敗者の視点から初めて記録した『仙台戊辰史』を著したのが僕の祖父、藤原相之助です。祖父は秋田県出身で田沢湖のほとりの生保内（おぼないむら）村、現在の仙北市南東部で生まれ育ち、のちに河北新報の記者として活躍しました。地主の長男で、幼いころは近隣の角館にあった塾に通って漢籍などを、維新後は外国語も学んだようです。

生保内村は秋田県と岩手県、当時は秋田藩と南部藩との境に位置し、江戸時代から藩境のいさかいが多かった地域です。戊辰戦争では秋田藩が新政府側についたため、あたりの田んぼ一帯が官軍と賊軍の戦場になりました。戦いの混乱の中で家族が逃げるとき、赤ん坊だった祖父はカゴに入れられたまま草原の中に置いてきぼりにされてしまいました。気づいた家族が青ざめて探し回ったら、茅の束の中で一人すやすや眠っていて、この子は大した子だと言われたそうです。

後になってそのことを聞かされた祖父は、自分の経験したあの戦いは、戊辰戦争とは何だったのか知りたくなった。けれど、当時はきちんとした記録もありませんでした。子どもだった祖父は、そのまた祖父になぜ記録がないのか訊ねたところ、「せっかく塾で勉学をしているのだから、大人になったら自分で調べて研究してみなさい」と言われた。それならば、と新聞記者になってから、生き残っていた当事者に取材して証言を記録し、明治維新全体の流れと照らしながら客観的に考察したのが『仙台戊辰史』です。

――戦記は勝者側の視点から書かれることが多い中、客観的に書かれたということが重要ですね。

そう思います。祖父は最初、東北新聞に就職し、そこが倒産して河北新報に入ったそうですが、新聞社のある宮城県仙台市で暮らしていたため旧仙台藩の書物などの資料も数多くあり、藩の重要人物も存命で生き証人の声を聴くことができました。御一新によって旧藩のしがらみもなくなり、自由に取材できるようになったことも幸いしたと思います。

『仙台戊辰史』は、きちんとした証拠と取材に基づいた近代的な手法の記録であったことからたちまち評判になり、学術的にも評価されました。その評判に薩長の人たちが反発し、旧長州藩の末松謙澄が反論書として『防長回天史』を書いたと言われています。祖父が書いた世良修蔵に関する記述が気に入らないと、子孫がわが家に押しかけてきたこともありました。

祖父はもともと、社会学的な視点を持ち合わせていたのでしょう。それに従って戊辰戦争を記録したことで、歴史の評価のあるべき姿を示してくれました。その精神はわが家に受け継がれています。

明治維新の功罪

――明治維新から日露戦争に至る40年について、藤原さんはどのように評価されますか。

近年、明治維新の評価を見直そうという動きが起きていますね。その理由の一つに、戊辰戦争で新政府軍が会津で行ったひどい仕打ちがあります。それ以前から「白河以北一山百文」、つまり白河の関から北の土地には価値がないと言われてきた東北の歴史があり、「河北新報」の名は、そのような侮蔑への反骨精神を示しているといいます。祖父が戊辰戦争の中立的な記録を書いた背景には、それまで軽んじられてきた東北の人間として、薩長中心で歴史をつくられてしまうことへの反発があったのかもしれません。

それはあくまでも東北の視点ではありますが、やはり歴史的事実として薩長主導で尊皇・攘夷・開国・佐幕という四つのワードによる対立構造がつくられ、長州藩出身者が陸軍を、薩摩藩出身者が海軍を掌握して日本の権力構造の中枢をなしたことがあります。その体制で日清・日露戦争に辛うじて勝利したことが驕りにつながり、のちの第二次世界大戦を招いたということは言えるでしょう。

勝者が歴史をつくるということは世界的にもよく見られ、歴史の客観的な評価が定まるには長い時間がかかるものです。明治維新の評価も見直されていくかもしれないですね。

――一方で、明治の殖産興業政策によって日本の近代化は一気に進みました。最近は渋沢栄一が日本的経営のルーツとして再評価されています。

そうですね。経済記者時代、どこを取材しても原点を辿ると渋沢栄一に行き着くのに驚いたことがあります。第一国立銀行、東京証券取引所、東京商法会議所（東京商工会議所）の設立はもとより、海運も、製紙も、インフラも、あらゆる産業の礎を築いたわけですからね。なぜもっと評価されないのか疑問に思ってきました。

その当時、取材などで全国銀行協会によく出入りする中で事務局長の北原道貫さんとお近づきになり、「金融のことはよく分かりません」と言うと「いつでも聞きに来いよ」とおっしゃるので、しょっちゅうお邪魔していました。北原さんは日本の金融経済界の生き証人のような方で、その後、協会の副会長まで務められましたが、本当にいろいろなことを教えてくださいました。僕に金融記者が務まったのは北原さんのお陰と言っても過言ではありません。

その北原さんが渋沢栄一を尊敬されていて、渋沢が近代日本経済に果たした役割についてよく話していました。全国銀行協会のビルには渋沢栄一の胸像があり、北原さんを訪ねるときはいつもその胸像に心の中で挨拶していたこともいい思い出です。

渋沢栄一は経済というものを通じて、封建制の社会から自由で平等な競争が可能な社会への転換を促し、自由経済と倫理・道徳の両立を理念とした、志の高い人でした。彼の業績と思想が日本型資本主義の礎となり、のちの経済発展にまでつながったことは間違いないと言えるでしょう。

新一万円札に肖像が採用されたことでも注目されていますし、今後、渋沢栄一が近代日本の経済発展に果たした役割についての評価も高まっていくと思います。

藤原 作弥 ふじわら さくや

1937年仙台市に生まれる。旧満州安東（現丹東）で終戦を迎え、1946年11月帰国。1962年東京外語大学フランス学科卒業後、時事通信入社。オタワ・ワシントン特派員、編集委員、解説委員長などを歴任。1998年から2003年まで日本銀行副総裁、2003年から2007年まで日立総合計画研究所社長を務める。
著書に『聖母病院の友人たち』（日本エッセイストクラブ賞受賞）、『満州、少国民の戦記』、『李香蘭・私の半生』（山口淑子氏との共著）、『死を看取るこころ』、『満州の風』、『素顔の日銀副総裁日記』ほか多数。

記事の続きをWebマガジン「Executive Foresight Online」に掲載しています。

【第3回】
父と共に大陸で経験した敗戦
言語民俗学者であった父が生きた大正から昭和の日本。軍事大国への歩みがつまずいた原因の一つとして「権力の集中」を指摘する藤原氏。父に伴われて渡った満州国への思いも語る。

【第4回】
戦後の日本社会と歩みを重ねて
敗戦後に余儀なくされた難民生活で衝撃的な体験をしたという藤原氏。引き揚げてきた戦後の日本での体験と、アメリカへのアンビバレントな思い。戦後の社会の歩みと重なる自身の心の変遷について語る。

【第5回】
これからの日本がめざすべき道とは
藤原氏は、自伝を共著した山口淑子氏の生涯からアイデンティティの問題について考えるようになったと話す。翻って考える日本のアイデンティティとは何か。次なる40年で日本がめざすべき道とは――。